
Civil wars transmigration of the soul—戦国輪廻—

アリシマ槍ヘイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Civil wars transmigration of
the soul―戦国輪廻―

【Nコード】

N9812A

【作者名】

アリシマ槍ヘイ

【あらすじ】

戦国武将、大谷吉継の生まれ変わりである刑部京輔は亡くした家族を取り戻すことができる『反魂の術』を得る為に、妖術師天海の計画する『祭』と言う名の戦いに参加をする。同じ戦国武将の生まれ変わり達と出会い、激しい戦いを繰り広げる京輔。彼は最後まで立ち続けることが出来るのだろうか？白刃が舞い、血風が吹き荒れるバトルアクションファンタジー、開幕。

act. 1

+

刀は胸の前で抜いた。刃文を確かめるように彼女は大きな二重の目を細める。

朱色の鞘から姿を現す彼女の鋭い刃。鞘は今まで座っていたベンチに置いた。

いわゆる白刃、と言うより夜の闇に溶けてしまいそうな鈍色。

その鈍色の刃は長く厚く冴えていて、宝石のような妖しい光を放っている。

とにかく、恐ろしく斬れそうな刀だ。

ぞくり、と背中を痺れが刺す。

思わず足が激しく震え、骨の髄まで戦慄が駆け巡る。この震えはどこから来ているのだろうか。

大気を揺らす刀の雄々しい雰囲気、気圧されているのか。それとも、持ち主の発する、体をえぐられるような強い殺気を一身に受けている恐怖からか。

分からない。分からないが、京輔が止まれと念じても自身の震えは言うことを聞かず、彼はただ焦るばかりだった。

思わず、震えた溜め息がこぼれ出る。

吐く息が街灯に照らされて白く舞う晩秋の夜。街灯は彼女の顔も照らし、ただでさえ白い皮膚を一層白く際立たせている。

―風が吹いた。

彼女の着ている、見慣れない真っ白いブレザーの制服が微かに揺れている。それとベリーショートの前髪も。

冬の寒さを孕んだ凍てつく空気。それより遥かに冷たく、氷をそのまま具現化したと言われても疑いようのない、彼女の宝刀。

彼女はその刀をゆっくり正眼に構えて、彼――刑部京輔の前に立ちただかった。

彼女の唯一の目的は、妖しく光る宝刀を京輔の心臓に突き入れ、その動きを一度止めること。

それで、彼女の望みはやつと一歩進むことができる。

「神山雪花：いえ、上杉謙信と言った方がいいでしょうか：」

彼女はゆっくり口を開き、凜と低く呟いた。

「：行きます」

正眼に構えた刀を上げる。ゆっくりと、あくまで優雅に。

余程修練を積んでいるのだろう。上段に構え直すその動作は一つの運動としての美しさを湛えていた。

風に流された落ち葉が舞っている。公園は静寂を保ったまま、何の変化もない。

彼女は今、この空間の全てを支配していた。勿論、京輔の生殺与奪の権も握っている。

構えたまま、どのくらいの時間が流れたのだろうか。

不意に京輔は捻り出すように声を発した。

「：もう、いい」

痛みを伴う殺気を常に与えられていた京輔は、既に半ば諦めていた。自分が消えるということは誰かの望みが叶うということになる。

しかし、差し当たって目の前の彼女になら、望みを叶える権利を譲渡してもいいかも知れない。

そう、思うようになっていた。

覚悟した京輔は目を瞑り、口の端を少し上げ、微笑して手を広げる。

「：遠慮しなくていい：来な」

もう一度目を開けて、京輔は驚いた。
彼女の目から涙が溢れている。

たった一粒だけの孤独な雫。しかし、京輔にはかけがえのないものに見えた。

「ごめんね」

目は強い光を宿したままだったが、口はそう動いたように見えた。
その時、彼女の腕が動き出した。

瞬間、張り詰めた空気が発破される。

彼女は風とともに踏み込む。足元の砂が飛び、落ち葉が舞う。

同時に構えた上段から刀を振り下ろす。

裂いた空気が悲鳴を上げた。

京輔はまた目を瞑った。

一撃。

これで終わり。

京輔は確かにそう感じていた。

+

「お前が刑部京輔か」

京輔の目線の少し上からしわがれた声が降ってきた。

「…どちら様ですか？」

京輔が首を上げると、男が胡座をかいて座っていた。
浮いている。リビングの丁度中央に。

高度は京輔の背より少し高い程度。

「儂を知らぬか。天海と言う。：本当に知らぬのか？」

天海と名乗った男はやや失望したように京輔を見下ろし、口髭を捻ったり伸ばしたりしている。

四十代も後半だろうか。黒髪のアールバックに白髪が混じっている。しかし、妙に若作りで顔の血色は良かった。

「知りません」

泥棒でも強盗でもなさそうだ。

京輔は漠然とそう思っていた。

最初から警戒する気など無かった。京輔はいつもこうだ。

不用心で無鉄砲でオマケに一途。従兄弟の九坂吾朗曰く

「とんでもなく危うい」

青年なのだ。

今も目の前の不思議な男との会話を楽しもうとしている節がある。

「フフ：気になるか？」

「ええ」

京輔は間を置かずに頷いた。

「儂は現代最強の妖術師にして、戦国の世の最期を見届けた南光坊天海の生まれ変わりである」

そう言って天海は髭から手を離すと手の平を上に向けた。

「見ろ」

突然、天海の手の手平から炎が生まれた。

「これがお前の家族を焼いた炎だ」

にやり、と天海が下卑た笑顔を見せた。

京輔は二年前に火事で家族を亡くしていた。天海はそのことを知っている。

京輔は笑う天海を無意識に睨み据えていた。

疑問よりも先に怒りが噴出する。

天海に対するその怒りが理不尽なものだと分かっていたとしても。

「それが…何ですか…？」

心に負った大きな火傷。

それを他人に引っ掻き回されることほど不愉快なことはなかった。

「フフ：怒るな。聞け。：お前に千載一遇の機会を与えてやろうと思っっているのだ」

炎を握り潰す天海。火の粉が飛び散った。

「怒ってません」

「聞けと言っている：お前は家族を生き返らせたいとは思わないか？」

少し間を置いた後に京輔が吹き出した。

「生き返るなんてことはあり得ない。常識だろ、妖術師様」

京輔は馬鹿にしきったように薄ら笑いを浮かべる。

「己が尺度でしか物事を測れぬ童が：何も知らぬクセに偉そうなことを吐かすな」

天海も相当短気らしい。

コメカミに青筋を立てている。

「知っているさ、俺は刑部京輔。アンタは現代最強の妖術師、天海様、だろ？」

「しばらく黙っている」

天海の瞳が紫色に濁り、光った。

途端に京輔の首に得体の知れない大きな圧力がかかり締め付ける。

「……が……ぐ……」

振りほどこうにも掴む実体が無い。京輔の手は首の周りを慌ただしくさ迷うだけだった。

「聞け、お前は選ばれるべくして選ばれたのだ。儂の計画している『祭』にな」

急に京輔の首の圧力が消えた。

崩れ落ちる京輔。リビングのフローリングの床にうつ伏せに倒れこんだ。

「…ハア…意味…分かんねえ…ハア……」

「理解しろ。お前の前世は戦国武将、大谷吉継だ。つまり儂と同じ時代を生きた者なのだ。……限られた特別な者であるのだぞ。もっと嬉しそうにせんか」

「うる…さい…だから何だ？お前は…何がしたい？」

息も絶え絶えに言う。

「最強を知りたいのだ。例え生まれ変わったとしても」

「知ってどうする？」

「満足する。儂は娯楽が欲しいのだ。勿論勝ち残った者には褒美を出そう」

京輔はゆっくり起き上がり、床に座った。

「それが『死人を生き返らせる妖術』か…」

「そうだ。反魂の術と言う。…命、欲しくはないか？」

「欲しい」

京輔は弾けるように答えた。

それで家族が帰って来るのなら、喉から手が出るほど欲しい。

それが京輔の嘘偽りの無い率直な気持ちだった。

「ならば戦え、葬れ、そして生き残れ。その為の力は授けてやる」

また天海の瞳が紫に濁り始めている。

何か妖術でも使うのだろう。

「…分かった」

京輔は呟いた。

「生き残ってるやるよ。戦って、戦い抜いて必ず反魂の術を貰う。」

…天海、早く力をくれ」

「善し…前世の力を復活させる。行くぞ」

天海の眼球が光を放った。

その光は京輔の体を照らしていく。

京輔は何かが染み込むような感覚を感じていた。しかし、底知れぬ力が湧く、といった感覚ではない。

まるで、温い水がゆっくりと体を浸していくようだった。

ただ、何となく心地よかった。

それから一週間は何事も無く、変わらぬ日常をなぞるだけだった。休日の今日も、従兄弟の九坂吾朗が酒を持参して来て、一頻り一人で騒いで帰っていった。

これもいつものこと。

天海から連絡も無い。この戦いの規則、参加人数、祭の意味。聞きたいことは山積みだったが、肝心の天海が現れなかった。

「大谷吉継：か」

豊臣秀吉の家臣。秀吉の朝鮮出兵では軍監として朝鮮に渡り、明と和平交渉を行う。帰国後は病を患っていた。

秀吉の死後は石田三成の要請により関ヶ原の戦いに西軍として出陣。早くから小早川秀秋の裏切りを見抜き、小早川軍と奮戦する。しかし、小早川秀秋のみならず、周辺の脇坂氏らも寝返ったため、支えきれず自刃。

石田三成とは親友。

半日使って調べた結果がこれだった。

「微妙：だな」

あまり華やかな武将ではない。有名な武将でもなかった。どうせ戦国武将なら上杉謙信や武田信玄、織田信長の方が断然良い。

京輔は呑気にそう考えていた。

ふと、喉の渴きを覚えた京輔はコンビニに向かった。

外はひどく寒い。風も少し強い。もう冬は間近に迫っている。

その中を京輔は早足で歩いた。

近道を通り、コンビニへと急ぐ。足を早めれば少しは暖くなるだろうとも思っている。

途中、公園を横切った。月の無い夜。街灯の灯りがいつもより強く明るく感じる。

また冷たい風が吹いた。京輔は急いでコートのポケットに手を突っ込んだ。

その時、京輔の目に妙なものが止まった。

見慣れない真っ白な制服を来た女子高生がベンチに座っている。

この寒さの中をマフラーもコートもしていない。そのくせ背筋はピンと伸びていて寒そうには見えなかった。

京輔はしばらく足を止め、彼女を惚けたように眺めていた。

綺麗だった。

街灯に照らされた顔は白磁の磁器のようになめらかな白。触れれば壊れてしまいそうなほど緻密で端麗な容姿。

ベリーショートのが髪が美少年を思わせるが、紛れもない女性。

しばらく見惚れ、ハッと我に戻った京輔。

それまで向いていた方向を転換。彼女の方へ。

緊張を無理矢理押さえ込み、歩いていった。

少し近くと、彼女も京輔に気付いたようで、視線を向けてきた。

そして大きく目を見開き、驚いた顔した。しかし、すぐにその色は消えてまた先程と同じ無表情に戻る。

「…寒くないの？」

「余計な心配はいりません」

急に彼女の目付きが険しくなった。

それを京輔は彼女が勘違いをしていると思ってしまった。

「あ…いや、別にナンパって訳じゃ…」

何となく彼女の元へ行ってしまった。蝶が花を求めるようにごく自

然に。

しかし、そんなこと言える筈がない。言える筈ないが、ナンパの汚名は晴らしたい。

「その…寒そうだったから…」

「何を考えているんですか？…さ、早く始めましょう」

そう言うなり彼女は立ち上がり、立掛けてあった細長い袋を手にとった。

「…は？」

「得物は…無しなんです…拳法ですか」

炎のような緋色の袋。その紫色の紐をゆっくりと解く。

取り出したのは日本刀だった。

柄は鮮やかな橙色。鞘も橙色。彼女の白い制服に眩しいほどよく似合っていた。

「では…」

掴んだ刀をゆっくりと上げていく。

京輔は鋭利な何かを感じた。

その『何か』が何なのかは分からなかったが。

+

斬られていない。

生きている。

夢じゃない。

京輔はゆっくり目を開けた。

彼女は倒れていた。刀は掴んだまま。

「私が、始末しました」

後ろから小さな声が聞こえ京輔は振り向いた。

「吉継様をお迎えに参りました、冴と申します」

サイズの合わないダッフルコートに身を包んだ少女が頭を下げた。

年齢は上杉謙信こと神山雪花と同じくらいの十六、七歳だろう。

しかし、彼女よりは幾分か小柄だった。

「さ、吉継様」

冴は京輔手を取った。

「あ…少し待ってくれ」

彼女が神山雪花を倒したのだろうか。京輔はどうしても疑ってしまう。

しかし、現に雪花は倒れていて、京輔は無事。

冴の手をほどき、うつ伏せに倒れている雪花を抱き上げた。

「謙信をどうするのですか？」

感情の無い、冷たい声だった。

「このままじゃ凍死するかもしれないだろ」

ベンチに寝かせ、服の泥を払った。やはり白い制服は汚れてしまっていて、それが京輔には何となく残念に思えた。

更に、コートを脱ぎ雪花に掛けようと広げた。

「大丈夫でしょう。上杉謙信がそんなにヤワな筈がありません」

また、感情の無い声。

あまり愉快的な気がしなかった。

親指の腹で雪花の頬に付いた土を拭う京輔。

「それより、俺をどうするつもりなんだ？」

「ですから、お迎えに参りました。私の主、石田三隆様が首を長くしてお待ちです…ですから早く」

「分かった、行くよ。…この娘を俺の家まで運んでからな」

京輔は雪花にコートを被せ

「背負うから手伝ってくれ」

苦笑して言った。

「…はい」

それに不請不請従う冴だった。

「どうするのですか？」京輔の家に着いて、やっと冴は口を開いた。

「寝かせておくだけだよ。置き手紙でも置いておけばいいだろう？」

自分のベッドに雪花を寝かせた京輔。

いつの間にか雪花は吞気に寝息を立てていた。

「葉がよく効いていますね」

「葉…？」

京輔は置き手紙を書く手を止め、冴の方に振り向いた。

「吹き矢ですよ。化物と接近戦なんて、私にはとても…」

冴は悪戯っぽく笑っていた。

意外と強かな女性なのかもしれない。

冴の笑顔を見て、京輔はそう思った。

「さあさあ、早くしないと三隆様が怒ってしまいますから」

早く書け、と急かすように冴は背中を小突く。

「ああ、はいはい…」

この娘は苦手だ。

はっきりと京輔は思った。

act. 2

+

誰かに揺さぶられ、京輔は目を覚ました。

目を開けると、自分の寝室ではない見慣れぬ景色が広がっていた。
和室。京輔の住んでいるマンションには存在していないはずの部屋
だった。

いや、そもそも誰かに起こされる、なんてこともあり得ない。

家族は誰もいないのだから。

「お早うございます。布団を片付けたいので早く起きてくれませんか？」

ぼうつと天井を眺めながら霧のかかった頭を働かせていると、上から声が聞こえた。

「あ——、冴」

しばらく声の主を見上げた後、京輔は思い出したように声を上げた。

「さ、早くして下さい」

布団の端を握って急かす冴。

何故冴がいるのだろうか。

その前にここはどこなのか。

何故こんな場所で寝ていたのだろうか。

―そして自分は誰なのだろうか。

京輔の朦朧とする頭では思い出そうとしても、中々出てこない。ただ、目の前で自分の布団を剥ぎ取る女性が、冴であることだけは分かっていた。

「あー…えっと…」

以前にも冴にこうして起こされていた気がする。

ずっとずっと遙かな昔に、同じようにこんな和室で。

冴に―。

殆どデジャビュに近い、曖昧で根拠の無い記憶。

単なる思い込みかもしれない。

そう結論を出した京輔。

働かぬ頭のこととはしばらく無視して、黙ってすばしこく動く冴を見ていた。

余程慣れているのだろう。軽やかに動き回り寝具を片付けていく。無駄の無いその運動は一種の舞のようだった。

「少し待っていて下さい。今朝食を持ってきますから」

ときばきと布団を片付けてしまった冴は、すぐに部屋を出ていく。

「待ってる」

またデジャビュ。頭の奥、中枢の更に根幹の部分で感じた。

何度も往復して朝食の用意をする冴。

京輔の目の前には膳が置かれた。その上には模範的とも定番ともいえる朝食が並びたてられている。

味噌汁、アジの開き、漬物、納豆、海苔、それと白米。久しぶりの

和の朝食のフルコースだった。

それだけで京輔は嬉しくなる。

「いただきます」

感謝の念を存分に込めて手を合わせた。

「ところで、俺は昨日どうなったんだ？」

出されたものを全て平らげた後、京輔は尋ねた。
もう京輔の頭もはつきりしている。

昨日のことも質問以外のことは殆ど思い出していた。

「関ヶ原の毒気に当てられて気絶してしまいました」

情けない、と言わんばかりにため息を吐く冨。

「仕方ないだろ。あんな変な槍なんて手に取ったこともなかったんだから」

濡れたように真っ黒な槍。生きているかのように鼓動が鳴る槍。

京輔にとってとはとにかく不気味なモノだった。

「変ですか？ 関ヶ原は美しい槍です。ただ、想いが凝縮されているだけです」

「想い？」

「怨みです、約三百年分の。でなければあんなに禍禍しい、それこそ美しいくらいに禍禍しい武器にはなりません」

冨はさも当然のことであるかのように平然と言い放った。

「……俺は本当に関ヶ原を扱わなきゃいけないのか？」

出来ることなら、もう二度と触れたくはなかった。

自分が自分でなくなるような気がしたのだ。

手に取ると現れる、自分を喰らおとしているのかと思うほど押し寄せる情報の群れ。

そして爆発的に上昇する脳を焼くような熱。

昨日の京輔はそれらに押し潰されてしまったのだった。

「ですが、関ヶ原でなければ吉継様が勝ち抜くことは出来ないでしょう」

京輔の不安をまるで無視するように、断言する冨。

その瞳は真っ直ぐに京輔を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9812a/>

Civil wars transmigration of the soul—戦国輪廻—

2010年10月9日21時40分発行